
防災頭巾ちゃんと童話たち

ちゃんねる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

防災頭巾ちゃんと童話たち

【Nコード】

N7532K

【作者名】

ちゃんねる

【あらすじ】

あるところに防災頭巾ちゃんという女の子がいました。ぷっくりとしているほっぺは林檎のように赤く、何時も舌をペロリと出していて、その顔はまるで、具体的な名前の出せない、某お菓子メーカーのマスコットキャラのようでした。ただ違うことといえば、ギンギラの防災頭巾を被っていることです。

そんな防災頭巾ちゃんがゲームをしていた時、一体何が！？

狼は鼠以下！？

オババとは！！

ドキドキ・ワクワクとは無縁なお話です！マンマミーヤ……！
（……これ、あらすじ……かな？）

1 面倒くさいからに決まってるじゃない（前書き）

本格的なグリム童話を期待される方は、がっかりします。

まあ……冷たすぎない目で見ていただければ幸いです（笑）

1 面倒くさいからに決まってるじゃない

あるところに、とっても可愛い防災頭巾ほっぺいずきんという女の子がいました。頬はぷつくりと膨らんでいて、りんごのように紅く、何時も舌をペロリと出していました。具体的な名前は出せませんが、その姿はまるで某お菓子メーカーのマスコットキャラのようでした。ただ違うところと言えばギンギラした防災頭巾を被っていることです。

その日、防災頭巾は何時ものように、寝ころがって至福のひと時を過ごしていました。すると、防災頭巾はお母さんに何時もは言われないことを言われました。

「聞いて、防災頭巾」

「なあに？」

「オババの具合が悪くなっちゃったらしいの」

「え？ なあに？」

「だからね、オババの具合が悪くなっちゃったらしいのよ？」

「それで？」

「オババの所にお見舞いに行ってほしいの」

「だが断る」

その時です。『マンマミーヤ！』と言う声が部屋の中をこだましました。その言葉がお母さんを、変に刺激してしまったのでしょう。もう！ DSばっかやってると、お母さん取り上げるわよー！」

お母さんはピシャリと防災頭巾に言い放ちました。

しかし、防災頭巾は言いました。

「これはDSiよ」

「じゃあ、DSiを…」

「それに取り上げられたって、オババのところには行かないわよ」

その言葉にお母さんは叫びました。

「どうして！？ オババは元気が無いのに！！」

しかし、空気読めない。略してK・Yの防災頭巾はサラリと言いました。

「面倒くさいからに決まってるじゃない」

なんということでしょう。

防災頭巾は動きたくないようです。このままでは、お話が一向に進みません。

頑張れ、お母さん！防災頭巾を納得させて！！

「……………」

二人の間を重い沈黙が支配しました。

お母さんは観念した表情で言いました。

「……………分かったわ。行ってくれるなら、w i i ……か、買ってあげるわ」

「よっしゃ！行ってきます！！」

防災頭巾はフルーツとオババの大好きな赤ワインを入れたバスケットを持って、玄関の戸を勢いよく開けました。

「行ってらっしゃい」

そんなお母さんの声を、背中で受け止めながら、防災頭巾は意気揚々と森の中へ入って行きました。

これが防災頭巾の長い長い冒険の始まりだったとは、本人は知る由もありませんでした。

1 面倒くさいからに決まってるじゃない(後書き)

短すぎましたか？

まあ、そこは……はい。ほうっておいて下さい。

不定期更新ですが読んで頂ければ幸いです。

2 略してモリオ? (前書き)

マップの二足歩行です。

2 略してモリオ？

ある森の結構端っこの方で、防災頭巾を被った女の子はぼやいていました。

「お母さんがWii買ってくれるっていうから、出てきたけれど……」

防災頭巾を被った女の子……その名も防災頭巾は溜息をもらしました。そして

「迷ったわ……」

一人ごちました。

森の中、重くて狭い空を防災頭巾は、眺めていました。ついでに「ぐううう……」

お腹が悲しそうに泣きました。

「アイム……ハングライ……」

防災頭巾も悲しそうに、言いました。

でも、こんなところで突っ立ってたら、いつまでもオババの所になんか行けないし、何よりWiiが出来ないと思ったので、とりあえず、歩くことにしました。

「あ……」

歩き始めて、ようやく自分の持っているバスケットの中身に気が付きました。

同じ頃。

「ぐううう……」

同じ森で同じように、腹を空かしている狼がいました。げっそりと痩せていることと、現在の戦闘能力が鼠ねずみと同じくらいか、それ以下であることを除けば、茶色い毛並みと悪い目つきを持つ、どこにでもいる狼です。

狼は言います。独り言を。

「今日も……ウサギのひとつも狩れやしなかった……」

その狼は森ではちよつとばかし有名な狼でした。

“何かもつ色々と駄目な狼”として。

オレ……このまま死ぬのかな……。そう思った時でした。

「……」

何と前方に防災頭巾を被った、なんとも美味しそうな女の子がいるじゃあないですか！！ しかも顔は某お菓子メーカーのマスコットキャラにそっくりです！！ ほら、あの舌を出した女の子のことです！

「……」

まあ、森生まれ。森育ちの腹を空かした狼にそんな見た目はどうでも良いのですが。

「……」

狼は今までの経験と今の自分の状況（鼠以下）からいって、獲物を追いかけて捕まえる自身がありませんでした。例え相手が人間でも。そこで狼は

「や、やあお嬢ちゃん」

話しかけることにしました。この狼の選択肢にもつとマシになものは無かったのでしょうか。いくら動物や植物と話が出来る世界でも、相手が狼なら誰だって逃げると思います。

「あら、なあに。狼さん」

ゲームのやり過ぎで、ファンタジー脳になってしまったのでしょうか。防災頭巾はナチュナルに答えます。それに比べて

「こ、これから、どど……どちらに行くんだい??」

狼はかなりキョドっています。冷や汗のせいで全身の毛がぐつしよりしています。手のひらは手汗のせいで、べたべた・もやもや。なのに指先だけは冷たいです。

「オババの家よ。ウィ……オババの元気が無いっていうから」

「そ、そうなんだあゝ！ 優しいんだね！」

「あら、オババの元気が無いつて聞いたら、誰だつて心配するわ」
防災頭巾は、自分には当てはまらないことを言いました。

「へ、へえ〜！ そ、そうなんだあ〜……」

「……？」

「……え、え〜と……」

狼は焦りました。話すことはありません。狼はなんだか、少し恥ずかしくなりました。

「狼さん」

防災頭巾は少し困った顔をしていました。

「あ！ え、うん。なんだい？」

狼は、予想外なことに向こうから話し掛けてきたので、ちよつぴり救われました。しかし

「早くオババの所へ行きたいから、もうお別れね。ばいばい」

「……！」

狼ピンチ！ このままじゃせつかくの獲物を、逃がすことになつてしまいます。

狼は片手をパーの状態で前に突き出すというタンマ（待つてくれ）の姿勢で叫ぼうとしました。「ちよつと待つて！」と。

「ちよつ あー！」

が、防災頭巾のひらめいた！ の声に狼の台詞は寸断されました。
「ねえ、狼さん。狼さんは森生まれ森育ちの、森の男よね？ 略してモリオ？」

その言葉を聞くなり、狼は「モリオ」つて……。そう思い、なんと微妙な表情になりました。けれどそれは防災頭巾の略し方が微妙なだけで、モリオには違いありません。狼はモリオなのです。
「まあ、そうだけど……」

その言葉を聞くなり、防災頭巾の表情は花が咲いたように、ぱあっと明るくなりました。

「よかった！ 実は私、道に迷っていたの。道案内してくれないかしら？」

「！！」

狼チャンス！ しとめられる可能性がググッと上がりました。

「ねえ、狼さ「もちろんだとも！ この、人呼んで『森のコンパス』のオレが道を案内してやる！！」

狼は防災頭巾が言い終える前に了解し、話し口調は変わっていました。それに『森のコンパス』だなんて呼ばれたことは、一度もありませんでした。

「まあ！ ありがとう！」

「おうよ！」

自称『森のコンパス』は「ククク……今のオレは鼠と戦闘能力が同じくらい（もしくはそれ以下）なので、人間の小娘ひとり殺るのはきつい。だが、年老いた……しかも元気の無いババアならギリギリいけるだろう。ババア食って戦闘能力が回復したら、この小娘も食ってやろう……」と思いました。

一方、防災頭巾も「狼肉って美味しいのかしら……」と思っていました。

ふたりは相手に気付かれない角度で、いやらしい笑みをうかべました。

そして――……

「くぎゅるるるう……」

ふたりは迷子になったのでした。

2 略してモリオ? (後書き)

前書きは狼のことです(笑)

変な想像した方は発情期ですね(爆)

3 この鏡馬鹿ですか（前書き）

まえフリから始まります

3 この鏡馬鹿ですか

小さな国のお城の中のことです。お城で暮らす王妃は今日もお話しをしています。その相手は

「鏡よ鏡。この国で一番美しいのはだあれ？」

人ではありませんでした。一国の王妃は人ではなく、鏡とお話しをしていました。国の代表とも言える王妃の頭がこんなん、国民は納得するのでしょうか。もちろん鏡ですから返事をすることはありません。なので

「この国で一番美しいのは王妃様でございます」

と、自分の裏声で答えます。とても痛々しいです。こんな状況を他人に見られたら、私わたくしだったら恥はにかずか死んでしまいます。

「おや、王妃様。楽しそうでございますね」

見られてしまいました。

「ばあや？ ……召使の貴女あなたが私わたしを蔑あむというのですか。言っておきますが、貴女の代わりなど幾らでもいるのですよ」

分かりやすく言うと「馬鹿にすんな。殺すぞ」という意味です。

「それは失礼いたしました」

「ばあやは「フフフ」と口元を弛ゆるめますが、目が笑っていません。

「用があつたのではないのですか」

「あら、そうでした」

「なんですか」

「魔女が王妃様にこれを……と」

廊下から二人のメイドが装飾だらけで重そうな、趣味の悪い鏡を運んできました。どうやら王妃の痛い姿をみたのは一人だけではなかったようです。

「お返しなさい。私にはそんな鏡は必要ありません、と」

「しかし王妃様、これは『真実の鏡』と言って本当のこと教えてくれるそうです」

「それは真まことですか」

王妃様は魔女からの贈り物の前に立つと先程の質問をしました。
別に恥はずかしくないようです。

鏡は答えます。

「この国で一番美しいのは、お城に住む白雪姫です」

「……」

白雪姫とは王妃の義娘です。王妃は白雪姫のことを好ましく思っていますでした。その白雪姫に自分にふさわしいと思っている称号（勘違い）を取られるのは、とても憎いことでした。

「ちなみに貴女は、国の女性・2364人中2000番目に美しいです」

「なんですかそれ！ 微妙なのかキリがいいのか……いや、この鏡馬鹿ですか！？」

色々と突っ込みどころのある鏡に王妃はキレました。

「とにかく、白雪姫は貴女より遥かに美しい」

「……」

その日、国王の知らないところで白雪姫は森に連れて行かれました。

森の中に仰向けで倒れている防災頭巾を被った女の子と、狼がいました。

「『森のコンパス』さん……嘘をつく狼は、三枚におろしたら良いと思うの。ねえ、『森のコンパス』さんはどう思う？」

無表情で問う防災頭巾に

「……森じゃコンパスは役に立たないんだよ」
狼は力なく答えました。

「じゃあさあ、この空すいて空すいてしょうがないお腹をどうやって満

たすの……？ 狼を焼いて、お……狼をさぁ……食べるしかないと思うの……」

やる気のなさそうな口調で防災頭巾は尋ねます。

「……それは駄目。希望を捨てたらアカンよ」

狼は答えます。

「捨ててないから狼をミンチにして、ハンバーグにすれば良いと思っ
っているのよ……？」

「その表現が一番怖い……」

「心なしかハンバーグの匂いがしてきたわ……」

「それは気のせい…… あ、オレもしてきた……」

それは、とても美味しそうな匂いです。

「ハンバーグ……」

「コーンスープ」

「焼きたてパン！？」

ふたりはガバツと起き上がると、一斉に匂いのする方へ駆けま
した。

着いてみると小さな家の煙突から煙がモクモクと上がっていま
した。

「ガチャッ！」

ふたりは有無を言わず、家の中に入りました。なかにはたくさ
んのご馳走と

「ど、どなたですか？」

肌が白い、とても可愛らしく、美しい女性がいました。

「……」

しかし空腹のふたりの目に映っているのは目の前のご馳走だけで、
女性には気付いてすらいません。

ふたりはズンズンと血走った目でご馳走に向かいます。

「ちよ、あぁっ！ 食べないで下さい！！」

空腹のふたりに女性の言葉はきこえません。ふたりは目の前のご
馳走を（無断で）食すのに夢中です。

マナーもクソありません。手づかみで食べ、唾液とソースを口の回りにたくさん付けています。

「……」

女性はポカンと口を空け、食欲の怪物と化したふたりを、ただ呆然と見ていました。

「ただいまー！！ 白雪ごはん……」

「お、おかえりなさい……」

家主が帰ってくると、食い散らかされた汚い部屋と、口の周りに色んなものベツトリとつけて満足そうに寝ている防災頭巾と、白目をむき、ぶくぶくと泡を吹いて倒れている狼がいました。

4 なんじゃこりゃあああああ（前書き）

読んでね！

4 なんじゃこりゃああああ

ある森の中にある、ある家の中で

「狼さんが白目をむき、泡を吹いて死んでいる理由、それは……」

防災頭巾は言いました。そして、肌が白く美しい女性に人差し指を向けて言いました。

「あなたの料理が原因じゃないのかしら。白雪さん」

しかし、女性は探偵もどきの防災頭巾に反論します。

「そ、そんな訳ありません！ それにつ、そちらの狼さんとお会いするのは初めてです！」

防災頭巾はフツと笑ってから

「私達が来たのは確かに、偶然だわ。だけど、料理に毒が混入していたのは偶然ではないの……」

諭すような目で周りを見渡します。防災頭巾の目に映るのは白雪という名の女性、背丈が60cmほどの七人の小さな人達、数分前まで息をしていた狼……といつしよに散らかした部屋でした。

「……」

皆は黙って、防災頭巾が口を開くのを待ちます。

「何故なら貴女は、こちらの小さな方々を殺害するはずだったからです!!」

「ち、違います！ 私はこの方達に匿^{かくま}って頂いてる身！ 感謝をしても仕切れないのです!!」

白雪はすぐに反論しました。

「そうだ。それに白雪は毒なんか持っているはずないし、食材だって調達しているのは俺らだ」

小さい人の一人が言いました。白髪を後ろでひとつに束ねたおじいさんです。その人の言葉に「あ……」と白雪が声を漏らしました。

「どうしたの？」

防災頭巾が尋ねます。

「林檎を……」

「林檎？」

「はい。珍しく林檎売りの方がいらして――

『お嬢さん、林檎をひとつ買わんかね』といって林檎売りのお婆さんが、黒々とした林檎を差し出してきたの。でも私は黒い林檎以前に赤林檎より青林檎のほうが好きだったから

『遠慮します。黒い林檎は趣味じゃないんです』

と言ったの。そしたら……

『そうか……やはり駄目か……せつかくこんな森まで老体で辛い中売りに来たのに……はーあ。最近の若い者は……はーあ。』

って言うもんだから

『ご、ごめんなさいお婆さん！ 私、お婆さんの気持ち何も知らないで……っ！林檎、貰えるかしら……』

そう言うとお婆さんはにっこりと笑って

『毎度有り』

そう言うとお婆さんは、林檎を渡して去って行きました。お金も受け取らずに……――だから、今日の食材は節制さん達が採ってきた物だけではないんです」

「……白雪、その林檎の皮とか残っていないか？」

白雪の言葉を聞いて先程の小さい人が言いました。

「え？あ、はい！アップルパイに皮を入れたらいけないと思ったので……ちょっと待って下さい」

というか、ちょっと待って下さい。何故こんなことになっているのでしょうか。白雪が林檎の皮を取りに行っている間に時を遡ってみましょう――

『なんじゃこりやああああ！！』

家に戻ってきた家主の一人が、部屋の惨状を見て叫びました。因みにこの人は“憤怒”^{ふんぬ}と言います。彼は目つきが悪く、肌が見えるところは傷だらけです。

『いやー、ビックリだよな！ 帰ってきたらこれだもん！ オイラもビックリ！！』

一番最初に家に戻ってきた“歡喜”^{かんき}がハキハキした口調で言いました。目がパツチリとしていて、七人の中では最年少です。

『ビックリどころじゃねー！ー！よ！！ おい白雪！ なんだよこれ！！』

『な、なんか、ご飯の用意をしていたら、その人達が突然入ってきて……わ、私にも何がなんだか……』

白雪はビクビクしながら答えました。

『何がなんだかじゃねー！ー！よ！！』

憤怒が叫びました。そこに

『落ち着け憤怒』

家主の一人、“節制”が言いました。白髪でひとつ結びです。

『そうよ。きつとこの人達にも事情があつたんだし、白雪を攻めるのは違うと思うの』

キラキラとした目で、金髪が腰まである小さい人で唯一女性の“慈愛”^{じあい}は白雪を慰めているのか、彼女の膝をポンポン叩きながら言いました。そんな慈愛と節制に対し、

『ちっ、糞が！』

憤怒はそう吐き捨てると、ソファアにドツカリと腰を下ろしました。その隣には大きなお腹を出して、グースカと寝ている“怠惰”^{たいだ}がいました。が、

『てめえ怠惰！！ 邪魔にも程があんだろ！！』

憤怒に蹴り飛ばされました。そして

『げばお！！！！』

防災頭巾のパンパンに膨れたお腹にダイブする形となり、潰されたお腹から、先程まで美味しそうに並べられていたはずの料理がゲロという名の残念な姿になって、再び姿を現しました。そして『ビチャビチャビチャッ!』という音をたてて飛び散りました。

『『『『ぎああああああ!!』』』』

『ぐええ……。なんか出た……』

さすがに起きました。

『きつ、きつたねえ!! 何だよ、お前!』

憤怒が戸惑い気味に尋ねます。

『え? 私の名前? 私は防災頭巾よ』

『ちっげー! よ! 名前とか聞いてねー! よ!!』

『私達は貴女が何故、此处に居るのかを尋ねているのだ』

いままで本を読んでいて、何も言わなかった“勤勉”^{きんべん}が言いました。眼鏡を掛けていて、針金のような体をしたおじさんです。

『美味しそうな匂いがしたから。お腹が空きすぎて死にそうだったのよ』

『そっか、それは大変だったね』

うんうんと頷いて慈愛が言いました。慈愛と歓喜と白雪は納得したようです。

『あ、ご馳走様でした。美味しかったわ』

『だろー? 白雪ちゃんのごはん!!』

歓喜がそう言いながら防災頭巾に近づくと何かにぶつかりました。白目を剥いて、泡を吹いて倒れている狼です。

『『ぎあああああ!!』』』

防災頭巾と歓喜が絶叫しました。ていうか、今まで部屋にいて何故気が付かなかったんでしょう。

『お、狼さんが死んでるわ!』

『なんだ、気付いていなかったのか……』

『じ、事件よ! これは殺人(?) 事件よ!』

節制の言葉が聞こえないくらい、防災頭巾は興奮していました。

『いや、聞けよ』

『大丈夫、まかせて！ これでも謎解きゲームもやってたんだから！』

『なんだこいつ』

憤怒が呆れていました。

『美味しいハンバーグ、コンスープ、パン、………そういえば右半分は狼に食われたな………クソが！ ん………？ 私は右半分を食べていない………』

防災頭巾がぶつぶつと呟きます。そして『ハッ！』として

『ど、どうしたんですか？』

「狼さんが白目をむき、泡を吹いて死んでいる理由、それは………」
という最初の台詞にもどります。

「これがその林檎の皮です」

そう言っ、白雪は節制に渡しました。

「ありがとうございます、白雪」

節制が言います。

「勤勉、これが何か分かるか？」

「毒の魔法」

そう答えると勤勉は目を下にむけ、読書の続きをします。

「やはりか……」

「白雪さん、あなたに魔法が使えるとは思って無かったわ……」

防災頭巾は以外そうに言いました。

「え！？ 私、魔法なんて使えませんが……」

「そうだ。白雪に魔法は使えない。魔法は林檎を売っていた老婆がかけたものだろう」

「いいえ、白雪さんよ！」

防災頭巾はまだ白雪を疑っているようです。

「てめーは黙ってる！」

憤怒が言いました。

「とにかく、魔法を解かない限り、その狼は死んだままだ！ 早く解かなければ、大変なことになるぞ！」

4 なんじゃこりゃああああ（後書き）

よく分からない人へ

七人の名前は、

● 節制…おじいさん

● 憤怒…目つきとか悪い

● 歡喜…子供

● 慈愛…目がキラキラ

● 勤勉…眼鏡

● 怠惰…デブ

● 渴望…無口（台詞なし）この人は次回喋ってくれるでしょうか。

さて、狼さんの運命やいかに！！

5 うんこマンか(前書き)

前回・最後の台詞

「とにかく、魔法を解かない限り、その狼は死んだままだ！ 早く解かなければ、大変なことになるぞ！」 by 節制

5 うんこマンか

「大変なこと……って何？」

そう言った防災頭巾の足元には白目を剥いて、泡をふいている狼（死体）が転がっていました。

「……蠅^{はえ}がたかる」

節制が言い切りました。つまりは

「うんこになる……って、ことかしら……？」

「腐るってことだよ馬鹿！！」

節制が少し遠回しに言ったので、憤怒が防災頭巾に突っ込むことになりました。

「馬鹿？ 五月蠅^{うるさ}い蠅^{はえ}だこと……知らないの？ 蠅^{はえ}は排出物^{はいしゅつぶつ}にも集^{たか}るのよ？」

防災頭巾は呆れるように言いました。

「……！ てめー！ 今俺のこと蠅呼ばわりしたな！？ あとなんで排出物^{はいしゅつぶつ}って言い換える必要があるんだよ！ うんこで良いだろ！」

「うんこうんこ言って……うんこマンか！」

「うんこうんこ言ってんのはてめーだろうが！！ いちいちム力つくなあつ！ 殺されてえのか！」

「？ ……そんなはずないじゃない」

憤怒が必死なのに対し、防災頭巾は冷静に、馬鹿にした、じつとりとした目です。そんな防災頭巾に憤怒の“何か”が切れました。そして

「だー！ クソツ！ やっぱり殺す！ 殺してやーやめろ。見苦しいぞ」

叫びましたが、節制に沈められました。憤怒は舌打ちをしてから、ソファーに当たるように座りました。そんな憤怒を見てから、

「防災頭巾君、どうか悪く思わないでくれないか。こいつにも色々

と事情があるんだ」

節制は落ち着いた口調で語りかけました。

「し、仕方が無いわねっ！べ、別にあんたの為じゃないんだからね
！！」

防災頭巾は最近やったゲームの女の子の台詞を真似て言いました。

「何故ツンデレ……！」

勤勉の読んでいる『世界の歴史』という本のカバー下に『ツン
デレだぞっ！』というタイトルの本があることは、眼鏡をクイツと
掛け直した勤勉以外、誰も知りません。

「まあ、とにかく今は狼君をどうにかしなくては……」

節制がそう言うのと、部屋の中に重い雰囲気が流れました。皆が部
屋のと真ん中で倒れている狼を見ます。色々と想像したのでしょうか。
白雪が口を開きました。

「うつ、ごめんなさい。狼さん……ぐすつ。元はと、言えば、ひぐ
つ……私がアップルパイを作ったばかりに……」

元はと言えば、勝手に食べた狼の自業自得ですが、白雪は泣きな
がら、自分を責めました。そんな白雪に

「泣かないで、白雪。魔法を解けばいい話なのよ？」

慈愛が言いました。

「そうだ。みんなで力を合わせれば、きっと魔法も解けるはずだ」
節制が、みんなを見渡しながら言いました。この時防災頭巾は「
なんか面倒くさい事になってきた……」と狼のことは全然心配して
いませんでした。そんな中、

「俺は協力しないからな」

憤怒がイライラしながら言いました。

「え？　なんで？　こういう非・日常なこと、憤怒君は好きだと
思ったけどな」

歡喜は不思議そうに首を傾げます。

「どっこが『非・日常的なこと』だよ！　こないだもこんな事あつ

「あつた」

「どういふところかしら？」白雪さん

「じ、実は、以前はクシを……」

えながら答えました。

「クシで刺され……え？ 刺さった？ 刺……クシ？？」

「あの……毒がついたクシだったんです」

「……ですよ」

「実は白雪は、一週間位前に来たばかりなんだ」

⌈
⋮
⌋

「本当は白雪は王国の姫なんだ。しかし何故、こんな所俺達と生活

節制は白雪を見ました。その視線に気付き、

「では、続けるぞ。白雪の父、つまり国王は四、五年程前、妻を亡

してどういう訳か最近白雪を殺そうとする輩がいてな。さっきはク

シと言ったが、その前は腰紐だった」

「腰紐？」

「腰紐だ。……というか姫とかには反応しないんだな」

「？　そうね」

「……そうか、話を続ける。腰紐売りがある日現れ、白雪は腰紐が全く売れない腰紐売りを可哀想に思い、腰紐を買った。腰紐売りが白雪に腰紐を付けてくれると言うので、白雪は付けてもらうことにした。……だがそれは間違いだった。あろうことか、腰紐売りは腰紐で白雪を極度に締め上げ、白雪を窒息させたのだ。」

「腰を？」

「腰だ」

「……まあ、世の中そんなこともあるわよね」
なかなか無いと思います。

「……話を続けるぞ。腰紐で白雪は窒息したが、俺達が腰紐を切り、一件落着した。が、今度は突然、怪しいクシ売りに、例のごとく毒つきのクシで頭を刺され、白雪は倒れた。そこで俺達は、クシを抜いた。そうしたら意識がもどって一件落着……だったのだが」

「今度は狼さんが殺られちゃったってこと？」

白雪の生命力に色んな疑問を持ちながらも、防災頭巾は尋ねます。
「そうだ」

「というか白雪、騙されすぎです。この人には学習能力というものが無いのでしょうか。」

「……とりあえず」

「？」

「狼さんがそこに居ると怖いし、どっか置く所ないのかしら……」
防災頭巾の心境的には『怖い』というより、むしろ『邪魔』という方が合っています。

「^{がらす}硝子の棺がある」

勤勉が言いました。

「硝子の？」

「腰紐事件のときに、白雪が死んじゃうんじゃないかと思って、私が作ったの……」

慈愛が言いました。腰紐の一件のことは“腰紐事件”と称されているようです。

「ああ、狼さん……あなたにこの棺はかなり勿体無いと思うけど、ご冥福をお祈りするわ」

そう言つと、防災頭巾は胸の前で手を組みました。しかし

「え？ 魔女に魔法を解いてもらうんじゃ……」

「えっ……」

防災頭巾は心底嫌そうな顔をしました。

そんな白雪達のやり取りを、ある物を通して見ている人物がいま
した。

「ま、まだ生きていたのですね……！！ 白雪iiiiiii！！」

あの王妃です。

「うつせーなあ。いい加減諦めろしー」

「何ですか、鏡の分際で。それにあなた、最初は敬語使ってたじゃありませんか」

「うざっ。大体自分より馬鹿な奴に、んなこと言われたくないしー」

「ばっ……な、なんなんですかあなた。あなたなんか割ること造作も無いことなんですよ？」

一瞬顔が物凄い歪みましたが、平静を装います。

「老婆に化けて腰紐売ったり、クシぶっさしたり、毒林檎売ってる腰抜けに言われてもさー」

鏡は愉快そうに言います。

「腰抜け……？」

王妃が呟きました。そんな王妃に

「ほらほら、今度はどんな作戦をたてるんだー？」

鏡はおちよくるように言います。

「直接……」

「おー？」

「直接殺します」

王妃の目は今までにないほど、鋭い目つきになりました。

「……」

鏡は意外そうに黙りました。

「なんですか？」

王妃がそういうと、楽しそうに

「じゃあさあ、とっておきの殺りかたがあるんだけどさあ……」

そして不気味に鏡は言いました。

王妃は背筋が寒くなった気がしました。

5 うんこマンか（後書き）

原作はツッコミどころ満載です。

くわしくはWikipediaで調べてみてください。

「王妃、あんた……！」
とか思いました。

6 もう少し鏡を信じろってーなー（前書き）

聞いた話じゃ中国の方はキ・イチヤンや、ドラえ・んもグリムの一種だと思っているそう。なんか可愛いと思った。

6 もう少し鏡を信じてーなー

馬に跨った男達が森の獣道を行います。

先頭に行くのは、白馬に跨り煌びやかな服を着て、頭には王冠を乗せた男です。後ろには兵士が三人付いて来てました。

「王子」

兵士の一人が白馬に跨った男に話しかけます。

「何だ。兵士A」

「何も王子のお手を汚さずとも、私達が……」

「駄目だ。ガレーナ王妃様には王である私が手を下さなければ、私の国は呪われると言われた」

ガレーナ王妃とはあの鏡と話していた人です（こんな脅し文句、現代じゃあまり通じませんよね）

「しかし……森にそのような恐ろしい女が^{まもの}本当にいるのかどうか……」

先程の兵士が言いました。

「なんでも、森の動植物を食らい、その姿はクリオネの捕食姿よりもグロイというじゃないですか

……」

言っておきますが、兵士はいたって真面目です。

「しかしだな、兵士B……」

「そおですよ。おうじい、こんな森さつさとあとにしましよおよ
お」

「おかまし……いや、兵士C。そういう訳にはいかないのだ」

「あらやだ、おうじ。正直者なんだからあゝ。うっふふん？」

「は、あはは……」

おかまの台詞の最後に色気を漂わす“何か”が気になりましたが、笑ってごまかすことにしました。

結構小さな国の城で、王妃様は話をしていました。

「あの方法で、本当に、確実に白雪を死に追いやることが出来るのですか？」

王妃様のお喋り相手は可哀想なことに鏡でした。

鏡はいやしそうに答えます。

「そうに決まってるしー。もう少し鏡を信じろってーなー」

「……ところで、その口調はどうにかならないのですか」

「意味分かんねー」

「あなた、最初は敬語使ってたじゃないですか」

「ブーブー。はいブー。もう敬語なんて忘れたしー」

王妃はいつかこいつも、口の利けないようにしてやろう。と思いました。そして、そういえば口ってどこだろう。と思いました。

森の中で狼がガラスの棺で眠っていました。

「ああ、なんて不釣合いな……」

防災頭巾を被った女の子が言いました。

「ところで節制さん。魔法をかけた人に魔法を解いてもらうしかないって言っていたけれど……どうしたら“その人”の居場所が分かるかしら……」

毒林檎でアップルパイを作ってしまった白雪が言いました。

「そうだな。だが此処にいれば、またあの女は近いうちに来ると思う。その時に聞けばいいさ」

「ちっ。『急がないと』とか言ってたのは誰だよ」

今日も憤怒はイライラしています。カルシウムの摂取をオススメします。

狼の死体が見えてないかのように、歡喜がハキハキと言いました。
「てかさー、なんで白雪ちゃん狙われてんの？　もしかして、お父さんの再婚相手の……えーと、あ、姑？」

「継母と言いたいのか？」

節制が言いました。

「それだ！　……その人が狙ってるって事は無いの？　その人は白雪ちゃんのこと、いっぱい嫌いだったんだろ？」

その疑問に勤勉が答えます。

「その可能性は低いと思う。大体、殺すのなら森につれてきた日に殺すだろう。……大方、国の政治等に不満を持っている者が、“姫”ということからの興味本位だろうな」

それが違うんですよ、勤勉さん。犯人はしゅうと……王妃まきはなです。

「違うのかー……」

歡喜は自分の推理が違うということに（本当はあってる）少しガツカリして、木にもたれ掛かり、視線を狼のその先にやりました。
そして

「ん？」

先方から馬に跨った四人の男が向かってくるのに気付きました。

「どうしたの歡……」

慈愛も気付きました。歡喜と慈愛の視線に全員、気付きました。
そして

「そのの者達。このあたりで恐ろしい魔者を見たことはないか」

一人の兵士おとこが尋ねました。

「魔者？　魔物の間違いではないだろうか」
勤勉が言いました。

「いや、魔者だ。なんでも女の姿ひとをした恐ろしい魔者らしいのだ」

「女？　このあたりでは慈愛くらいではないだろうか」

「慈愛？」

「私だよ」

「「「えっ」」」

みれば慈愛そのひとは、社会の汚さをまるで知らない、赤ん坊のような純粹な瞳をしていたので

「いや、この娘こがそんな恐ろしい者にはとても見えない！ どちらかと言えば、その頭巾を被った娘では無いだろうか！」

兵士おとこの一人が防災頭巾を指差して叫びました。

「あゝ あ？」

防災頭巾はおもいつきり顔を顰しかめました。ヤ○ザにも負けないメンチのきり方です。その顔に

「こ、こいつだー！！ クリオネの捕食姿どころの怖さじゃないぞー！！」

兵士に悪気はありません。気付いたら口から駄々漏れに漏れていただけなんです。

「クリオネ？ ……のように可愛らしい？」

「いや、絶対ちげえだろ」

憤怒が呆れたように言いました。そして「この反応は」と付け足しました。

「では、この辺にそのような魔者おんなはいないのだな？」

「ああ。他にいるといったら、一週間前に来た白雪と今日出会った防災頭巾ぐらいだからな」
このこ

「！ 白雪！？」

“白雪”という名前に、男達は反応を示しました。

「どうかしたのか」

節制が尋ねると一人の兵士が答えました。

「どうかしたも何も、退治してくれと頼まれた魔者の名前は“白雪”だと、ガレーナ王妃様が仰っていたのだ……」

「義母様おかあさまが！？」

白雪が驚愕しました。

なんとも言えない空気が流れました。

「やはり……か」

防災頭巾が探偵を気取って言いました。この人は本当に空気が読めない人です。UZAI（ム力つく）です。

「えっ……、あ！ てことはやっぱり姑さんが犯人だったんだな！」

歓喜は自分の考えが合っていたことに大喜びです。この子もなかなかのKY（空気よめない）です。

「静かにしろ」

節制がKYコンビ（阿呆）に言いました。

「そうか。そんなことが……」

大きな森の小さな家の前に大人数の人がいました。

「ああ。……こんな話、信じてもらえるか分らんが、真実だ」

「……たしかに、白雪がそのように、腰紐で縛られたり、クシで刺されたりされたことも信じがたいが……」

白馬に乗っていた男が気まずそうに言いました。白雪も気まずそうに顔を逸らしました。

「何より、貴女が姫だということに驚いた。だが、その顔を見れば分かる。あの方にそっくりだ」

「！」

白雪は逸らしていた顔を男にゆっくりと向けました。

「あの方」というのが白雪の実母のことだと理解した時、白雪は

嬉しそうな、寂しそうな表情をして「……そう、ですか」と呟き、俯きました。

「あのお、水を差すようで悪いんですけど……、さっきの話聞いてて、この狼は大丈夫なのかしらって思ったんですけど……大丈夫なんですかあ？」

兵士の一人が窺うように言いました。

「いや、早くしないと大変な事になる」

節制が腕を組みながら唸りました。

そこに防災頭巾がこんなことを言いました。

「あ、そうだ王子様。良かったら、引き取ってくれないかしら」

『！？』

皆（一部除く）が防災頭巾の言葉に目を丸くしました。

「わ、私は構わないが……良いのか？」

「ええ。狼さんもこんなトコで朽ち果てるより、剥製にされて王宮で立派に飾られた方が幸せだと思うの」

もちろんモリオ（森生まれ、森育ちの森の男）の狼はそんなこと思っ
てませんが、防災頭巾はこれから狼の為に動くのが面倒くさい
のです。勿論悪気は0です。ただ面倒くさいとは思ってません。

「防災頭巾……といったか。本当にそうなら私がありがたくこの狼、貰いつけよう」

「まあ。お願いするわ」

防災頭巾は特に何でもないように、例えるのなら、家族にゴミだしをお願いするような感じで言いました。

「兵士A・B・C、この狼を運べ」

王子がそう命令すると

「「はいっ！」「」

「はいっ？」

兵士三人は「ビシッ」っと音がしそうな敬礼をしました。（約一名の語尾は気にしないことにします）

「……え？」

小さな人達（一部除く）と白雪は呆然としていました。

「それでは、この狼は城へ連れて行く。……良いのか」

「？ 良いわ」

王子の心配そうな声に「何故そんなことを聞くのか」と疑問を覚えつつ防災頭巾は頷きました。

「……そうか」

王子がそう言ったその時、

ガシャーーン！！

『！？』

背後からした大きな音に、その場の人間と、その場の森の動物達の視線が一箇所に集まりました。

「す、すみません……」

見るとガラスの棺は砕け散っていました。

狼の体には沢山のガラス片が刺さっていました。だからなのでしょう
うか。

「いったーーーーー！！」

『！？』

起きました。まさかまさかです。なんで起きたんだ。

「……予想外」

勤勉が眼鏡の奥の目を丸くさせながら呟きました。作者だって予

想外です。

「あ？……な、なんだあ？」

狼はきよとんとしながらいいます。ガラスの刺さった体のいたる所からピューっと血が吹き出しています。

「……あ」

『あ？』

誰かの声に皆が反応して

「あ」

皆が気付きました。

「アップルパイが……」

落ちていました。唾液、胃液……それは色んな液でまみれていました。

「吐き出したのか！！」

節制が驚いたように叫びました。というか

「丸呑み……？」

アップルパイは嚙んだ跡すらありませんでした。ちなみに狼に歯はちゃんとあります。とつても鋭い歯が。こんなだから“何かもう色々と駄目な狼”なんて名前がつくんです。

「え……？ 何？」

驚きと呆れが漂う空気のなか

「……」

一人の兵士が、クスリと笑ったことには誰も気付きませんでした。

6 もう少し鏡を信じろってーなー（後書き）

狼復活！

もうすぐ『白雪姫編』完結！

……すると良いな。

7 仕方ありませんね。それではこの子を殺します（前書き）

最初と比べて、ギャグ少なくなってるし。更新明らかに遅い。

おい、責任者は誰だ！

防災頭巾「馬鹿が……！」

7 仕方ありませんね。それではこの子を殺します

「……俺、死んでたの？」

目覚めてから数分後のことでした。

「そうよ。まったく、狼さんたら往生際が悪いんだから」

溜息まじりの防災頭巾の台詞は少しも狼をいたわっていません。
そんな姿に

「ぼ、防災頭巾さん？」

“この人は本当に狼さんのことどうでもいいと思っていたの……？”と白雪は信じられないような目で防災頭巾を見ました。次第にそれは何かを決意したような眼差しに変わっていきました。

「……」

憤怒はそんな白雪を見逃してはいませんでした。

「……どういことですか。白雪はまだ死んでないじゃないですか
！」

ガシャーン！

王妃は募るばかりの苛立ちをぶつけるように、飾ってあったツボを思い切り床にたたきつけました。

「まあ、落ちつけてー」

はあはあと息を荒げ、興奮している王妃に鏡は言いました。

「あなた。隣国の王子に頼めば白雪を殺せると言ってたじゃないですか」

「えー？そういう風には言つとらんよー？」

「……」

「んー？ そんな怖い顔して鏡を壊す気？」

「はい」

「やめとけしー。 所詮は鏡だしさー」

王妃は壺の破片を拾いました。強く握り締めたせいで、高級そうな絨毯には赤い液体が染みしました。

「そう…… 所詮は鏡なのですから」

王妃は自分に言い聞かせるように言つと

「じゃあ、言つとくけ…… 「あなたの言葉などに二度と耳などかすものか！ー」

王妃は壺の破片を握り締めた手を思い切り、振りかぶり

パリーン

鏡を割りました

「はあ…… はあ……」

飛び散った鏡の破片には、とても醜い女が映っていました。

女は薄く笑つて

「白雪…… 次は貴女の番です……」

自分を映す鏡達を見下ろしました。

「そういうことなら、私たちが送ってあげよう」

「まあ、本当？ あなたならそう言ってくれると信じていたわ」

その言葉通り、防災頭巾は王子が道案内してくれるはず。と思い

ながら、自分が道に迷っていることを伝えました。

「白雪、お前も送ってもらったらどうだ」

「え？」

「白雪は連れてこられた身、帰り道など知らないだろう」

「……はい」

「白雪、そんな顔しないで……別れが辛くなっちゃうよ」
慈愛は涙目で白雪を見つめました。

そんな感動的シーンのなか

「狼君は防災頭巾あのこについて行くのかい」

勤勉のいきなりの質問です。

「ハウツツ!!」

狼は思い出しました。

（何をやってんだ俺は、元々は防災頭巾あいつをしとめるために、一緒にいたのに……何週間ぶりの飯（最後に食べたのは草）は吐き出し（吐き出さなかつたら死んでました）……ん？ いや、さてよ？今の状況って周りが獲物だらけ、しかも皆隙だらけの絶好のチャンスなんじゃあねえか！？ いやいや、ちよつと待て。『二兎追うもの一兎も得ず』っていう諺ことわざもある。だからこの場合、目標ターゲットは一人に絞るべきだ。そうすると……兵士は絶対無理。あの冠乗せてる奴は銃持ってるだろうし、てか男連中は危なっかしい。あの一番小さいはいしやいでる奴と目がキラキラしてる奴は食ってて腹壊しそうだあと、精神的に無理。あの美人のネーちゃんは……俺、殺されかけたんだっけ……。じゃあ、残るは……やっぱり、防災頭巾あいつか……」
狼の心の声はいつの間にか外に出ていました。

「心のなか、ダダ漏れじゃないか」

勤勉が狼のぶつぶつ声に呆れながら言いました。

ちなみに狼の選択肢に動物がいないのは狼が（ry

「と、とりあえずオ……僕は防災頭巾ちゃんについていくよぉ〜！」

狼は勤勉の方を向きながら、防災頭巾を意識して言いました。最初に出会ったときのうざいテンションで油断させるつもりみたいです。本当うざい。

「……」

勤勉は無言で本に目を向けました。

「白雪っ！ またっ……また会おうね？」
慈愛が目を潤ませながら言いました。

「白雪ちゃん、また一緒に遊ぼうね！」
歓喜はまたね！ と言う様子です。

「元気でな」
節制の言葉

「……」
憤怒は何も言いません。

「負けるな」
勤勉の言葉

「…………ぐおー」
怠惰の汚い軀いびきです。

「…………またいつか」
渴望が呟きました。

「はい…………。短い間でしたが、ありがとうございました」
馬に乗った白雪は複雑な表情で告げました。

「防災頭巾ちゃんも…………さよならっ…………！」
慈愛の言葉に続く節制達の言葉に防災頭巾は

「出会いがあれば、別れもあるわ」
そう言いながら、

“最後の人…………誰？”
と今まで台詞も描写も無かった人に対して思いました。
防災頭巾は遠い目をしていました。

「…………。行ってしまったな」

「憤怒くん、寂しい??」

「あ? 別に元々いなかった奴じゃねーか」
そう言つて、歡喜を睨みつけました。そこに

「!」

一人の女がやって来るのを見つけました。
その姿を見て、節制が落ち着いた口調で言いました。

「……そうか。お前が事の火付け人か」

女はギョロリとした目で周囲を見渡すと

「ここに、白雪という女は来ませんでしたか？」

そう尋ねました。

「ああ、来た。だが、もう此処にはいないよ」

節制は落ちついた口調で返します。

「そうですか。では何処に行ったか……教えてくれませんか？」

「駄目だ」

「何故ですか？」

「お前は手に持っているそれで白雪を殺める気だろうからな」

女の手には大きなガラス片が握られていました。血が滴^{したた}っていることから、強く握り絞めているのがわかります。

「そんなことよりも、白雪が何処に行ったか教えてもらえませんか？」

「教えられない」

節制が変わらぬ返事をする、女は近くにいた慈愛の髪を引っ張り、自分の懷に引き寄せました。

「仕方ありませんね。それではこの子を殺します」

女はガラス片の先を慈愛の喉元に当てました。

そんな様子を見て

「また、ベタなことすんな」

憤怒が溜息をつきながら言いました。

「教えてください……」

慈愛の喉元から、赤いものが流れてきました。

「……っ」

慈愛が顔を顰^{しか}めました。

「早くしないと、この子の首が飛びますよ」

「……ベタすぎてつまんねえ」

舌打ちが聞こえました。

7 仕方ありませんね。それではこの子を殺します（後書き）

んー。頭の中では（お話）出来てんです。

でもどんどん知らない展開へ。

グリム童話ー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532k/>

防災頭巾ちゃんと童話たち

2010年10月11日07時38分発行